

インド英語の発音

——特にヒンディー語話者（ウルドゥー語話者）の話す母語の影響の強い英語の発音について——

榎木 蘭 鉄 也

I. はじめに

1. ヒンディー語話者の英語を記述する理由

インド亜大陸にはオーストロ系諸語、シナ・チベット系諸語、ドラヴィダ系諸語、インド・アーリヤ系諸語の4つの語族が存在する。インドの総言語数は諸説あり、179あるいは826（奈良、1981）または1652（Sachdeva, 1999）あると言われる。英語を学ぶときには母語からのtransferまたはinterferenceを受けるのが普通である。そうなら、インド亜大陸の言語の数だけ英語の音韻システムがあると言えよう。もしインドの言語数が1652なら、1652種類の英語の音韻システムが存在することになる。

本稿では、特に、ヒンディー語（ウルドゥー語）の影響を受けた英語の発音を取り上げ、その音韻システムを記述する（以下から、特に明記していない場合を除き、「インド英語」はあるいは「インドの英語」は、ほぼヒンディー語話者の話す英語を指す）。

ヒンディー語はインドの連邦全体の公用語であり、インドで最大の話者数を持つ最も強力な言語である。なお、ヒンディー語とウルドゥー語の発音体系はほとんど同じであるので、本稿ではほぼ同一言語として扱う。また、ヒンディー語の発音体系は、北インドにおける他の主要な周辺言語の発音体系とも酷似する。よって、ヒンディー語話者の英語の発音を理解すれば、インド英語の発音はかなり理解できることになる。

2. インド英語をRPと比較する理由

次章からRPをインド英語と比較して、その相違点と共通点を記述する。RPを比較対象とする理由は、もともと英語はイギリスからインドにもたらされたため、長い間イギリス英語がインド人の英語のモデルだったからである。

3. 母語の影響

英語の発音は、話者がどんな英語をモデルと考えているか、どういう教育を受けたかによって異なってくる。一般的に、教育レベルが低い人ほど発音に母語の影響が強まり、教育レベルが高い人の発音は、母語の影響が小さい。特に、英語を教育用語とする有名私立学校（インドではそういう学校をPublic Schoolと言う）出身者、外国によく行く人、外国人と接する機会が多い人は、英語の発音に母語の影響があるものの、外国人にとって分かりやすい英語を話す傾向にある。

外国人をしばしば困惑させる日本の「カタカナ英語」のように、母語の影響を強烈に受けた純正インド式発音で英語が話されるとき、外国人は困惑することが多い。おもしろいことに、海外のインド人には、衣食住の習慣を決して変えない人が多いが、同様に、長年外国に住んでもインド式発音を変えようとしらない人が多い。

インド、特にヒンディー語圏では、教科書の教師用指導書や英語辞書や英会話教則本の多くに

ヒンディー語の文字であるデーヴァナーガリー文字がしばしば発音表記の補助のために用いられている。これは日本のカタカナ英語に相当し、インド式発音の原因の一つと考えられる。

最近でこそ、衛星放送などのテレビ番組も普及しつつあるが、普通のインド人は母語英語の音声に触れることが多くない。英語の音声教材、特に英語母語話者の音声教材はほとんど普及していない。したがって、ほとんどのインド人の英語のモデルは、教師や家族など周囲の人やテレビやラジオに出演しているインド人だと言えよう。それにしても、インド人は英語の聞き取り練習をほとんどおこなわないが、なぜか聞き取り能力にすぐれている。多言語の環境で揉まれているためであろうか。

II. ヒンディー語話者の話すインド英語の発音

1. 分析対象と分析方法

本稿では、榎木蘭 (1989)、Koshal (1978)、Shams-ud-Din (1983)などを参考にして、母語であるヒンディー語の発音体系の影響を十分受けた、日本の「カタカナ英語」に相当するような英語の発音体系を記述する。

日本の「カタカナ英語」の多くが国語辞典に収録されているように、インドでも膨大な数の英語がインド語の辞書に収録されている。筆者はその発音や表記法に注目し、いくつかのヒンディー語辞書やウルドゥー語辞書を調査した(参考にした辞書は参考文献の後に記載)。また、前述したとおり、英語・ヒンディー語辞書にはヒンディー語の文字であるデーヴァナーガリー文字で英語の発音表記をしているものが多いが、その発音表記も任意に辞書から抽出し、分析した。

以下は、その分析の結果である。

2. ヒンディー語とRPの母音

まず、Bailey (1974)、Gimson (1980)、McGregor (1987)、田中・町田 (1986)を参考にして、RP (Received Pronunciation) とヒンディー語の母音を比較する。

ヒンディー語には3つの短母音 ([a] {または[ʌ]}、[u]、[i]) と7つの長母音 ([a:]、[i:]、[u:]、[e:]、[ɛ:]、[o:]、[ɔ:]) の合計10ある。

一方、RPの母音数には諸説(例えば、Gimson, 1980のように三重母音を「二重母音+schwa」と解釈する説)があるが、ここではインド英語の発音の特徴を明確化するため、分類の細かい *Longman Dictionary of Contemporary English* (1991) の例を取り上げる。RPには、7つの短母音 ([i]、[u]、[e]、[æ]、[ʌ]、[ɔ]、[ə])、5つの長母音 ([i:]、[ɑ:]、[ɔ:]、[u:]、[ə:])、8つの二重母音 ([ei]、[ou]、[ai]、[au]、[oi]、[iə]、[eə]、[uə])、加えて5つの三重母音 ([eiə]、[ouə]、[aiə]、[auə]、[oiə]) があり、合計25もある。

インド英語とRPに共通(類似)する母音は、3つの短母音 ([ə]と[a] {または[ʌ]}、[u]、[i]) と4つの長母音 ([ɑ:]と[a]、[i:]、[u:]、[ɔ:]) だけで、ヒンディー語の母音はRPのそれよりも圧倒的に少ない。この少ない母音を組み合わせるとなるとかRPの母音の代用をしようというわけである。例えば、ヒンディー語には二重母音も三重母音もないので、ヒンディー語の少ない母音、ときには子音を動員して、その代用をさせるわけである。その組み合わせ方に、インド英語独自の特徴がよく見られるのである。ちなみに、インド学での慣習では、[ɔ:]を“au”、[ɛ:]を“ai”のように音声表記するが、音声学的にこれらは二重母音ではなく長母音である。

3. インド英語の短母音

(1)[i], [ɪ]

RPの[i] ([ɪ]) はインド英語でもほとんど同価の音の[i]である。ただし、語末ではよく長母音化される。これは語末の開音節が長母音になることが多いヒンディー語の影響であろう。また、ヒンディー語では長母音に強勢がおかれるので、同様に、インド英語でも語末の[i:]に強勢がおかれることがある。

[i]の直後に他の母音が続くとき、間に[j]を嵌入せれることがある(例、radio [re:Diʝo:]).

しばしば語中の[i]は長音化する(例、furniture [farni:tʃar]). そしてこの場合もその長音のところに強勢がおかれることがある。

しばしば過去分詞接尾辞-edを[e:D]と発音する。

(2)[e]

RPの[e]はインド英語では[e:]となることが多い(例、press [pre:s]). その他、[i] (例、engine [indʒan]), [a] (例、general [dʒanaral]), [i:] (例、preference [pri:farans]), そしてまれに[ɛ:] (例、temporary [Tɛ:mparari:]) となることもある。また、実際には短めに[e]となることも多い。

(3)[æ]

RPの[æ]はインド英語では[ɛ:] (例、bank [bɛ:ŋk]) あるいは/e:/ (例、album [e:lɒm]) になることがほとんどである。ヒンディー語話者には[e]と[æ]の区別は分かりにくいのかもしれない。まれに[a]となることもある(例、bank [baŋk]).

(4)[ɔ]

RPの[ɔ]はインド英語で[a:] (例、pocket [pa:ke:T], office [a:fis]) は、あるいは[o:] (例、potash [po:Tɛ:f]) になる。また、まれに[u] (例、potash [puTa:f]), [a] (例、box [baks]), [ɛ:] (例、squash [skʌɛ:f]) となることもある。

(5)[u]

RPの[u]はインド英語でもほぼ同じ音価の[u]だが、長母音化して[u:]となることもある(例、butcher [bu:tʃar]).

(6)[ʌ]

RPの[ʌ]はインド英語では[a] (この音価を[ʌ]とする学者もいる) に対応する(例、club [klab]). 綴り字発音のため、時々/u/となることもある(例、buckram [bukram]).

(7)[ə]

インド英語が音節拍リズムで話されるとき、母音の弱形はいつも強形で発音される。また、綴り字発音の傾向があるため、弱母音の綴りに則って発音されることが多い(Ⅲ. 2 参照)。よって、RPの弱母音[ə]はインド英語でも類似音の[a] (表記は[ʌ]とも) になるが、綴り字発音の影響が強いときには、[e:] (例、cricket [krike:T]), [ɛ:] (例、parole [pɛ:ro:l], alarm [ɛ:la:m]),

[a:] (例、programme [pro:gra:m]) などとなる。特に、aの綴りに対応するときは[ɛ:]となることが多い。

4. インド英語の長母音

(1)[i:]

RPの[i:]はインド英語でもほとんど同じ音価の[i:]である。

(2)[ɑ:]

RPのはインド英語では[a:]で、かなり似た音である

(3)[ɔ:]

RPの[ɔ:]はインド英語ではほとんど[a:]となる (例、order [a:rDə]). しばしば[o:]になることもある (例、board [bo:rD]). また、ヒンディー化が進むとまれに[a]となることがある (例、August [agast]).

(4)[u:]

RPの[u:]はインド英語でもほとんど同じ音価の[u:]となることがほとんどであるが、まれに[u]または[a]となることがある (例、supermarket [supəma:rke:t], platoon [plətu:n]).

(5)[ə:]

RPの[ə:]はインド英語では綴り字の r も発音されて[ar]となる (例、berth [bɜ:th], university [ju:ni:ˈvɜ:rsi:ti:]). また、長母音化されたり、綴り字発音がおこなわれて次のような発音になることも多い (例、work [wɔ:rk], attorney [əˈtɔ:rnɪ:/əˈtɑ:rnɪ:]).

5. インド英語の二重母音

(1)[ei]

RPの[ei]はインド英語ではほぼ[e:]となる (例、paste [pe:sT]). ヒンディー化が進むとまれに[a]となる例も見られる (例、April [əprɛ:l]).

(2)[ou]

RPの[ou]はインド英語では[o:]となることがほとんどである (例、coat [ko:t]). 時々 [o:u] (語末では[o:u:]) となることもある (例、boat [bo:uT]) が、これは短母音[o:]と短母音[u(:)]との組み合わせである。

(3)[ai]

RPの[ai]はインド英語では[a:i] (語末では[a:i:]) となることが多い (例、cycle [sa:ikil]). これは短母音[a:]と短母音[i(:)]との組み合わせと解釈できよう)。しかし、実際のところ、[ai]のように短く発音されることも多い。また、ヒンディー化が進むと[ɛ:]になることもある (例、cycle [sɛ:kil])

(4)[au]

RPの[au]はインド英語では[a:u]（語末では[a:u:]）となることが多い（例、town [Ta:un]。これは短母音[a:]と短母音[u(:)]との組み合わせと解釈できよう）。しかし、実際のところ、[au]のように短く発音されることも多い。また、ヒンディー化が進むと[ɔ:]になることもある（例、council [kɔ:nsil]、proud [prɔ:D]。これらは綴り字発音かもしれない）。

(5)[ɔi]

RPの[ɔi]はインド英語では[a:i]（語末では[a:i:]）、または[a:e:]となることが多い（例、oil [a:il/o:e:l]、boy [ba:e:]。これは短母音[a:]と短母音[i(:)]（または[e:]）との組み合わせと解釈できよう）。また、ヒンディー化が進むと[u:a:i(:)]、[u:a:e(:)]、[ɻa:i(:)]、[ɻa:e(:)]になることもある（長母音は語末のとき。例、boy [bɻa:i:/bu:a:e:]、boiler [bu:a:ilar/bɻa:ilar]）。

(6)[iə]

RPの[iə]はインド英語では[ija]（綴り上 r で終わるときは[ijar]）、または[ija:]（綴り上 r がいない場合）となるのが一般的である（例、beer [bijar]、mania [me:nija:]）。これは別個の音節である[i]と[ja]（または[jar]）との組み合わせと解釈できよう。また、[iar]となることもある（例、beer [biar]）。

(7)[ɛə]

RPの[ɛə]はインド英語では[e:ja]（綴り上 r で終わるときは[e:jar]）となることが一般的である（例、share [ʃe:jar]。しかし、実際のところ、[ear]のように短く発音されることも多い）。これは別個の音節である[e:]と[ja]（または[jar]）との組み合わせと解釈できよう。また、ヒンディー語化が進むと[e:]、[e:a]、[ɛ:]となることがもある（例、aerial [e:rijar]、bear [be:ar]、bearer [bɛ:ra:]）。

(8)[uə]

RPの[uə]はインド英語では[u:]（綴り上 r で終わるときは[u:r]）となることが多い（例、tournament [Tu:rna:me:nT]、poor [pu:r]）。また、しばしば[u:a]（綴り上 r で終わるときは[u:ar]）となることがもある（例、poor [pu:ar]）。

6. インド英語の三重母音

(1)[eiə]

RPの[eiə]はインド英語では通常[e:ya]（例、player [ple:jar]）、あるいは[e:a]となる（例、player [ple:ar]）。通常、綴り字に r が続くので、それらは[e:jar]あるいは[e:ar]となる。これは別個の音節の[e:]と[ja]（または[a]、[jar]、[ar]）との組み合わせであると考えられる。

(2)[ouə]

RPの[ouə]はインド英語では[o:ɻa]あるいは[o:a]となる。通常、綴り字に r が続くので、それらは[o:ɻar]あるいは[o:ar]となる（例、lower [lo:ɻar/lo:ar]）。構造的には、これら

は別個の音節の[o:]と[ʌa(r)] (あるいは[a(r)]) の組み合わせである。

(3)[aiə]

RPの[aiə]はインド英語では[a:ija]、[a:ja]、[a:i]などとなる。これも、通常、綴り字に r が続くので[a:ijar]、[a:jar]、[a:ir]となる (例、tyer [Ta:iyar/Ta:jar/Ta:ir]、umpire [ampa:ijar/ampa:jar/ampa:ir])。構造的には、これらは別個の音節である[a:] (+[i]) + [ja(r)]という組み合わせである。また、たまに[a:ia(r)]となることもある (例、tyre[Ta:iar])。最初の[a:]が短く発音されることも多い。

(4)[auə]

RPの[auə]はインド英語では[a:ʌa]あるいは[a:ua]となることがほとんどである。これも、通常、綴り字に r が続くので[a:ʌar]、[a:uar]となる (例、power [pa:ʌar/pa:uar]、tower [Ta:ʌar])。構造的には、これらは別個の音節の[a:] + [ʌa(r)] (あるいは[a:] + [u] + [a(r)]) の組み合わせである。最初の[a:]が短く発音されることも多い。

(5)[ɔiə]

RPの[ɔiə]はインド英語では[a:i]、[a:ja]、[a:ia]、[a:ija]などとなる (例、royal [ra:il/ra:jal/ra:ial/ra:ijal])。これも、通常、綴り字に r が続く場合は[a:ir]、[a:jar]、[a:iar]、[a:ijar]などとなる (例、employer [e:mpla:ir/e:mpla:jar/e:mpla:iar/e:mpla:ijar])。

7. インド英語の子音

田中・町田 (1986) によると、ヒンディー語には37個の子音がある。それに対してRPには24個の子音がある (外来子音[x]などは除く)。母音とは逆に、ヒンディー語の子音はRPの子音よりもはるかに多い。よって、ヒンディー語の子音でRPの子音を表すことはさほど困難ではない。ところが面白いことに、ヒンディー語話者が英語の子音を発音するとき、必ずしも最も近い音をあてるとは限らず、一種独特な対応関係を観察することができる。

8. インド英語の子音の具体例

(1)RPの[p]はインド英語でも[p]に対応する。ただし、RPで観察される語頭の[p]での強い帯気音がインド英語ではあまり観察されない。

(2)RPの[b]はインド英語でも[b]に対応する。

(3)RPの[t]はインド英語では[T] (反転音) になる (例、town [Ta:un])。また、RPで観察される語頭の[t]での強い帯気音がインド英語ではあまり観察されない。ヒンディー語化が進めば[t] (歯音) になることもある (例、bottle [bo:tal])。また、ヒンディー語化がかなり進んだ語ではまれに語末の[t]が脱落することがある (例、toast [to:s/To:sT])。

その他、過去分詞接尾辞 -ed がRPなら無声音[t]になる環境で、インド英語では有声の反転音[D]となることがある (例、passed [pɛ:sD])。インド英語では語末の[T] (RPの[t]対応) に[s]を付けると[Ts]となるのが一般的であるが、時々[Tz]あるいは[z]となることがある (例、

arts [a:rTs]、waltz [ʌa:Ts/ʌa:rlz/ʌa:lz])。反転音はインドの言語の大きな特徴で、英語の発音にインドらしさをかもし出す。

(4)RPの[d]はインド英語では反転音の[D]になる(例、double [Dabal])。インド英語では複数や三人称単数現在の -s を付けた -ds の発音は[Dz]となることが多いが、語末の[s]を無声化して[Ds]となることもある(例、hands [hɛ:nDz]、inwards [inʌarDs])。反転音はインドの言語の大きな特徴で、英語の発音にインドらしさをかもし出す。

(5)RPの[tʃ]と[dʒ]はインド英語でもほぼ同じ音の[tʃ]と[dʒ]になる。

(6)RPの[k]と[g]はインド英語でも同じ[k]と[g]である。ただし、RPで観察される語頭の[k]での強い帯気音がインド英語ではあまり観察されない。また、ghostのように綴り字にhが含まれる場合、帯気音化する事がある(例、ghost [g^ho:sT])。

(7)RPの[m]はインド英語でも[m]であるが、綴り字発音のため語末の綴りが^s-mbのとき、[mb]と発音されることがある(例、comb [ko:mb])。

(8)RPの[n]はインド英語でもほぼ同じ音価の[n]である。反転音の直前では同化のため反転音化されることもある(例、kind [ka:iND])

(9)RPの[ŋ]が語末に来るとき、インド英語ではしばしば[ŋg]、またまれに[鼻母音+ŋ]となる。(例、dancing [Dɛ:nsɪŋg])

(10)RPの[l]はインド英語でもほとんど同じ音価の[l]である。厳密に言うと、インド英語の[l]は「明るいl (clear l)」だけで、「暗いl (dark l)」は発音されない。ちなみに、パンジャブ語にはlの反転音があるので、反転音[T]と[D]に隣接するlも反転音化する場合がある。反転音はインドの言語の大きな特徴で、英語の発音にインドらしさをかもし出す。

(11)RPの[f]はインド英語でも[f]となることが多いが、教育程度の低い話者は[p^h]と発音することもある。これは、元来、[f]がインド諸言語固有の音ではなく、ペルシャ語や英語のような外来の言語と一緒にインドに入ってきた音で、多くのインドの言語が[p^h]を表す文字に「点」をつけてで[f]の代用をしていることが多いからであろう。

(12)RPの[v]と[w]はインド英語では[ʋ] (唇歯無摩擦継続音: labio-dental frictionless continuant) となることが多い。多くのインド人は[v]と[w]の区別ができず、両方を[ʋ]で代用する。なお、前置詞ofはほとんど[a:f]と発音される。これはインド英語には強形と弱形の区別がないのと、綴り字発音のためであろう。

(13)RPの[θ]はインド英語では[t^h] (歯音の帯気破裂音 aspirated dental) となる(例、berth [bart^h])。また、まれに[T]、[t]、[s]となることもある(例、marathon [ma:raTo:n/ma:rato:n/

ma:raso:n])).

(14)RPの[ð]はインド英語では[d]となることがほとんどである (例、leather [le:dar])).

(15)RPの[s]はインド英語でもほとんど同じ音価の[s]である (例、sorry [sa:ri:])). また、RPでは[s]となる環境の複数や三人称単数現在を表す-sがインド英語では[z]となることがある (例、hoofs [hu:fz])). それに特に東インドには[s]と[ʃ]を区別できない人が多いので、彼らの英語でもその2つの音の混同がよくおこる。

(16)RPの[z]もインド英語でも大体同じ音価の[z]となるが、RPでは[z]となる環境の複数や三人称単数現在を表す-sがインド英語では[s]となることがある (例、fees [fi:s]、matches [ma:tʃis])).

外国語の素養がないインド人や教育程度の高くないインド人には、[z]と[dʒ]を混同する人が多い。これは[z]がペルシャ語や英語から入った外来の音で、本来のインドの言語になかった音だからである。ちなみに、ヒンディー語では[dʒ]を表す文字に「点」をつけて[z]を表記する (例、This is a pen. [diʃ idʒ ɛ: pe:n])).

(17)RPでは/r/の調音のときに舌先が口蓋に触れないが、ヒンディー語など多くのインドの言語の/r/は弾き音あるいはふるえ音で、舌先が口蓋に触れる。よって、インド英語での/r/はRPのそれと聞こえ方が異なる。綴りにあるrは必ず発音される傾向がある。まれに/r/が反転音化することもある。

(18)RPの[ʃ]もインド英語でもほとんど同じ音価の[ʃ]である。例外としてattaché [aT tʃi:]がある。これは綴り字発音であろうか。

(19)RPの[ʒ]はインド英語では[dʒ]、[ʒ]、[z]、[ʃ]、[j]などとなる。多くのインド人は[dʒ]で代用しているようである (例、television [Te:le:v idʒ an/Te:le:v iʒ an/Te:le:v izan/Te:le:v iʃ an]、measure [me:dʒ ar/me:jar])). [ʒ]はペルシャ語や英語と共にインドに入った音声で、もともとインドの言語にはない音である (ペルシャ語の影響の強い言語であるウルドゥー語の話者には区別できる人が多い)。多くのインドの言語では[dʒ]を表記する文字に「点」をつけて[ʒ]を表記することが多い。

(20)RPの[j]はインド英語でも[j]となることがほとんどであるが (例、yeast [ji:sT])、時々[j]が脱落する (例、year [iar])).

(21)RPの[h]もインド英語でもほとんど[h]であるが、ヒンディー語化が進むとまれに脱落することもある (例、hospital [ho:spata:l/haspata:l/aspata:l])).

(22)RPの[hw]はインド英語では[hʌ]となることが多いが、[h]が脱落して[ʌ]となることも多い (例、whale [hʌ e:l/ʌ e:l]、whiskey [hʌ iski:/ʌ iski:])).

Ⅲ. インド英語のその他の特徴

1. 強勢

Shams-ud-Din (1983) は、ウルドゥー語（ヒンディー語でも同じ）話者は、英語を話すときに長母音に強勢をおく傾向があると言う。また、語末の音節が閉音節のとき、最後の音節に強勢がおかれることが多い。最後の音節が開音節のときは、後ろから2番目の音節に強勢がおかれることが多い。なお、これらはウルドゥー語（ヒンディー語も同じ）の特徴である。

インドでは学校や各種の英語の試験で、いわゆる発音問題がほとんどないこともあってか、強勢の位置に頓着しない人が多い。例えば、平気でinterestingとかnecessaryのように発音する。また、品詞によって強勢の位置の変わる語でも、強勢の位置に頓着しない。

例えば、increase（名詞）record（名詞）などと平気で発音する。それに、母語英語では名詞と名詞の複合語は、「強+弱」と発音するが、インド人はそのこともほとんど気にしない。

2. 弱形と強形

RPの超分節音素は強勢拍リズムである。それに対し、インドの言語のほとんどは音節拍リズムの言語である。当然、インド英語も音節拍リズムで話されることが多くなる。よって、インド英語ではRPのように強形と弱形の区別をしないことが多い。例えば、不定冠詞 a は[ɛ:]（RPでの強形[a]に対応）、定冠詞 the は[di:]、前置詞 of は[ɑ:f]、同様に、助動詞 can も[kɛ:n]と発音されることがほとんどである。

3. リエゾン、語末の閉鎖音の発音

筆者の観察では、インド人が英語を話すときは母語英語ほどリエゾンがおこなわれない。また、母語英語でよくある無破裂閉鎖音も几帳面に発音される。言いかえれば、インド人は英語を1語1語比較的きちんと発音している。非母語話者同士でのコミュニケーションではこのように1語1語丁寧に発音する方が聞き取りやすく通じやすいので、このような特徴は国際コミュニケーションの場では歓迎されるであろう。

4. 音節の構造

RPの音節の構造は<(C)(C)(C)V(C)(C)(C)>である（Cは子音、Vは母音を表す。（ ）は省略可能の意味）。それに対してヒンディー語（ウルドゥー語）の音節の構造は<(C)V(C)(C)>である。インド英語の発音もヒンディー語の音節構造に則って発音されることが多くなる。するとインド英語では、分節法（cityの分節はRPではcit-yだが、インド英語ではci-tyとなる）や語頭および語末の子音群に母音を嵌入させたりしてもRPのそれと違った特徴をもつことになる（schoolを[isku:l]、simpleを[simpal]と発音することが多い）。

5. 鼻腔破裂

ヒンディー語には鼻腔破裂（nasal plosion）がなく、破裂音と鼻音の間に [a] や [i] を嵌入させる。インド英語でも同様な現象が見られる。例えば、buttonは[baTan]、Clintonは[kilinTan]となる。

6. 綴り字発音

インド英語では、英語の音声教材があまりないことと、発音に頓着しない人が多いことから、綴り字発音がよく観察できる（例えば、Wednesdayを [ˈwe:De:sDe:]、combを [ko:mb]、proudを [pro:D]、ghost [gho:sT]と発音）。それに、母音の後の r はほとんど発音される。それも弾音 (flap) で発音されることが多いので非常に耳につく感じがする。複数形や3人称単数現在の -s も有声音になるべき環境でも無声音になることが多い。

7. 超分節音素のコミュニケーションへの影響

インド英語は話者の母語の影響で、音節拍リズムで話されることが多いが、度が過ぎると「平板で速射砲のようで歌を歌うような感じ」の発音になり、通じにくくなることがある (Shamsud-Din, 1983)。また、Kachru (1983) と Nihalani 他 (1985) も、インド英語が通じにくいのは音節拍リズムなどの超分節音素が原因だという。

IV. 「教育のあるインド人の英語」(EIE) とその発音

Parasher (1991) の調査では、インド人のホワイトカラーの多くが教育あるインド人の英語を英語学習モデルと考えている。一方、旧宗主国イギリスの英語をモデルと考える人も少なくない。

榎木蘭 (1996) や Nihalani ほか (1985) によると、インドの代表的な英語と外国語の研究機関である中央英語外国語研究所 (Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad) は、インド人の現実的な英語学習モデルとして「教育のあるインド人の英語 (Educated Indian English. 以下、EIE)」を提案してきた。EIEの発音システムは、国際コミュニケーションで通じる程度に英語へのインド諸語の特徴を許容している。例えば、国際的通用性を高めるために、超分節音素は強勢拍リズムを用いることを提案している。

V. おわりに

Bansal (1969) や Parasher (1991) は、教育あるインド人の英語の発音は現状のままで国際コミュニケーション通用すると言っている。Nihalani 他 (1979) は少し謙虚で、国際的通用性のためにインド英語でも超分節音素はRPのそれに従って、強勢拍リズムで発音するべきだと言っている。Kachru (1983) は、インドの言語と同じ超分節音素 (音節拍リズム) で発音されるとき、インド英語が分かりにくくなるという。

非母語英語が国際的に通じにくくなるのは、特殊な語句や独特の発音が必要以上に多用されるときである。インドは、現在、ITや経済の自由化で世界の注目を集めている。インド人と英語で話す機会も今後はもっと多くなるであろう。インド人と英語でよりよいコミュニケーションをするために、私たちはインド人の英語について知っておく必要がある。

(注)

1) 本稿文中の発音記号の [a] は口の開きが小さい日本語の「ア」に近い母音である (low front unrounded)。

2) [D]と[T]は、それぞれ[d]と[t]の反転音をあらわす (retroflex stops)。また[N]は[n]の反転音を表す。これは音声学の正式な表記法ではない。筆者使用のワープロで、反転音をあらわす

音標文字および補助記号の tail や under-dot が表記できないため、やむなく代用しているのえある（ちなみに、インド学ではこの表記をよく用いる）。

3) 子音字に続く[h]は帯気音をあらわす(aspiration)。

参考文献

- Bailey, T Grahame. (1974) *Teach Yourself Books: Urdu*, David McKay Company: New York.
- Bansal, R.K. (1969) *Intelligibility of Indian English*, Central Institute of English and Foreign Languages: Hyderabad.
- 榎木蘭鉄也 (1989) 「ヒンディー語／ウルドゥー語話者の話す『インド英語』の音変化について」『KELT』第5号：神戸大学大学院教育学研究科英語教育研究会
- 榎木蘭鉄也 (1996) 「インドの英語教育政策と英語に対する考え方：特に、中央英語外国語研究所 (Central Institute of English and Foreign Languages) の考え方について」第22回全国英語教育学会仙台研究大会・口頭発表
- 榎木蘭鉄也 (2000) 「アジアの英語事情：インドの場合」『英語教育』2000年12月号：大修館書店
- Gimson, A.C. (1980). *An Introduction to the Pronunciation of English third Edition*, Arnold.
- 本名信行(2000) 「言語とコミュニケーション」『imidas 2001』集英社
- Kachru, B. B. (1983) *The Indianization of English: The English Language in India*, Oxford University Press: New Delhi.
- Koshal, Sanyukta. (1978) *Conflicting Phonological Patterns*, Bahri Publications: New Delhi.
- McGregor, R.S. (1987) *Outline of Hindi Grammar*, Oxford University Press: Delhi.
- 奈良毅 (1981) 「インド亜大陸の言語」『講座言語6：世界の言語』（北村甫（編））：大修館書店
- Nihalani, P, Tongue, R.K. and Hosali, P. (1985) *Indian and British English: A Handbook of Usage and Pronunciation*, Oxford University Press: New Delhi.
- Parasher, S.V. (1991) *Indian English: Functions and Form*, Bahri Publications: New Delhi.
- Pullum, Geoffrey and Ladusaw, William A. (1986) *Phonetic Symbol Guide*, the University of Chicago Press: Chicago.
- Sachdeva, K.S. (ed) (1999). *General Knowledge Encyclopedia 2000*, Competition Review Prt.Ltd.: New Delhi.
- Shams-ud-Din (1983) *The Pronunciation of English*, Caravan Book Centre: Multan.
- 田中敏雄、町田和彦 (1986) 『エクスプレスヒンディー語』白水社

参考にしたヒンディー語・ウルドゥー語の辞書

- Bashir Ahmad Qureshi (revised by Abdul Haq): *Advanced Twentieth Century Dictionary English into English and Urdu*, Educational Publishing House: Delhi
- Bashir Ahmad Qureshi (revised by Abdul Haq): *Practical Standard Twentieth Century Dictionary Urdu into English*, Anjun Book Depot, Delhi.

- Mirza Ghulam Muhammad Baig: *Current English Dictionary English into English and Urdu*, Ch. Ghulam Rasul & Sons: Lahore.
- Firoz-ul-Lghaat Urdu Jadiid Nayaa Ediishan*, Ferozsons Limited: Lahore.
- Muhammad Ahsan Khaan: *Ilmii Urduu Lughat*, Ilmii Kitaab Khaana: Lahore.
- John T Platts: *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi, and English*, Sang-e-Meel Publications: Lahore.
- S.K. Verma and R.N. Sahai (1986) *The Oxford Progressive English-Hindi Dictionary*, Oxford University Press: New Delhi.
- R.S. McGregor (1997) *The Oxford Hindi-English Dictionary*, Oxford University Press: New Delhi.
- B. Mohan and B.N. Kapoor (1986) *Meenakshi English-Hindi Dictionary*, Meenakshi Prakashan, Meerut.
- B. Mohan and B.N. Kapoor (1984) *Meenakshi Hindii-Angrezii Kosh*, Meenakshi Prakashan, Meerut.

(注) インドやパキスタンで出版されるインド諸語の辞書には、通常、発行年や編者が記載されていないので、上記文献のほとんどでも発行年は省略した。また、編者が明記されていない辞書は書名と出版社と出版地だけを記した。

(附言) この論文の基礎となる研究調査をおこなうに当たり、1996年度、ユアサ財団から研究補助金を受けていたことを附言する。